

リチャード三世
公演
@小劇場



『リチャード三世』

2019

2019年
3月

2019年
5~6月

2019年
8~11月

流れは
こんな感じ

1st
試演会@稽古場

2nd
試演会@稽古場

『スペインの戯曲』

2020

2020年
3月

3rd
試演会@小劇場

「作り手が、通常の一か月の稽古ではできないことを試し、作り、壊して、また作る場になりたい。」という小川演劇芸術監督の意を受け、一年間を通して作品を育てていくプロジェクトです。2019年3月より始まり、2020年3月に終了しました。

こつこつプロジェクトとは？

こつこつ第一期終了!!

こつこつ新聞

スペインの戯曲

作 ヤスミナ・レザ
翻訳 穴澤万里子

演出 **大澤 遊** おおさわ・ゆう



演劇ユニット「空っぽ人間〈EMPTY PERSONS〉」を主宰、すべての作品の構成、演出を手掛ける。文化庁新進芸術家海外研修制度の研修員としてイギリスのDerby Theatreにて1年間研修。これまでの主な演出に『まじめが肝心』『かもめ』『少年日が住む家』『ボクの穴、彼の穴』『ライフ・イン・ザ・シアター』など。演出補、演出助手として『イヌビト』『セールスマンの死』『出口なし』『外の道WIP』などに参加している。

公演について & 演出家プロフィール

リチャード三世

作 W.シェイクスピア
翻訳 松岡和子による

構成・演出 **西 悟志** にし・さとし



東京大学在学中より劇団を立ち上げ、2002年イヨネスコ『二人で狂う』の演出で利賀演出家コンクール優秀演出家賞を受賞。翌年、受賞作をモスクワで上演。他演出作に、イブセン『人形の家』、ワイルダー『わが町』、小説を劇化した阿部和重原作『ニッポンニッポン』など。05年の劇団解散後、10年間の活動休止を経て、16年にチョウソンハ・池田有希子の二人芝居『マクベス』、18年に静岡舞台芸術センター(SPAC)にてイヨネスコ『授業』を演出。

あーぶくたつた、にいたつた

作 別役 実

演出 **西沢栄治** にしざわ・えいじ



2000年、プロデュース形式のJAM SESSIONにて演出を始める。ギリシャ劇や歌舞伎などの古典を題材に、演劇ならではの表現で力強い舞台をつくる。04年、「日本演出家協会主催の若手演出家コンクール2003」に出場、最優秀賞を受賞。『雨の夏、三十人のジュリエットが還ってきた』『喜劇昭和の三部作』『ブランキ殺し上海の春』『キネマと怪人』『阿部定の犬』『天保十二年のシェイクスピア』『わが町』『夏の夜の夢』『牡丹燈籠』『女の平和』など。

こつこつ芸術監督より

この一年間、立ち止まることなく、三つの作品が「こつこつ」と時間と稽古を重ねていくことができました。とても嬉しく思っております。初めての試みとなった第一期では、長期間の稽古を重ねていくことの楽しさ、その意味、そして未来への可能性を身をもって実感いたしました。心残りとしては感染症の拡大に伴い、3rd試演会が予定とは違う形になってしまったことが残念であったのですが、第一期の軌跡と功績については、改めて資料としてまとめた上でどこまでもご覧いただける形で公開できればと考えております。この一年間、実際にやってみて初めて知った難しさや問題もありましたが、それを上回る喜びと手応えがありました。まだまだ試行錯誤を繰り返しながらではありますが、「こつこつプロジェクト」はこれからも続いて参ります。これからも何卒よろしくお願い申し上げます。

～作品の変遷～

スペインの戯曲

ヤスミナ・レザの饒舌な台詞と作品独特の二重構造を明確に捉えて立体化するため、翻訳作業や読み合せを含め戯曲の読み込みに多くの時間を割き、共通理解を深めていくことを目指した。



1stの様子 2019年6月 @稽古場



3rdの様子 2020年3月 @小劇場

リチャード三世

リチャードに女性を据え、西氏独特の演出法により「古典劇」と括られがちなシェイクスピア作品を、苦闘する私たちの「現在劇」へと浮かび上がらせるべく稽古が積み上げられた。



1stの様子 2019年5月 @稽古場



3rdの様子 2020年3月 @小劇場

あーぶくたっ、にいたっ

別役実の不条理な世界を肉体化し強度を上げるため、シーンを一つのつながりとしてでなく、瞬間瞬間がリアルに積みあがって一つの流れになることを目指す稽古が行われた。



2ndの様子 2019年8月 @稽古場



3rdの様子 2020年3月 @小劇場

制作担当ふり返り

手探りで始まった「こつこつプロジェクト」

第一期。三人の演出家はまるで違う三様のディベロップメントを展開し、演出家の資質と“作り方”の関係性を深く考える機会となりました。

普段とは違う、長い時間をかけて作品に向き合うための環境を得た時に、それぞれの演出家がどんなビジョンを持って進んでいくのか。ある人は「戯曲の理解を深める」ことに一年を費やし、ある人は自身の演出プランを断片から全体へ広げていくことに取り組み、ある人は一度完成形の見えた作品の「その先」を探りに行ったように思えます。最終的に、公演初日を目指す

時とは違う作り方の可能性をそれぞれの演出家が発見したように感じ、意義深いプロジェクト第一期となりました。劇場としては、試演会でのフィードバックの仕方などサポート体制にももう少し工夫が必要かもしれません。演出家が適切なサジェスチョンを得ながら進めていく仕組みを考えていきたいと思います。

デジタルブック作成中！

一カ月強という稽古期間にはしづられず、加えて「上演」というプレッシャーに押されずに作品と向き合う機会として立ち上がった『こつこつプロジェクト』。確かに通常の公演企画では大胆なトライ＆エラーや方向転換を稽古期間中に繰り返すのは時間的に難しい中、フェーズごとの稽古をしながらフィードバックをもらい、演出家が約1年間をかけてじっくりと作品に向き合えるこのシステムは非常に贅沢な企画でした。

ただし、時間があるからこそ、その時間をどのように使っていくのかというプランニングも大切だと感じました。今回は最初に公開のリー

ディング公演を実施、その後非公開のファースト、セカンド、サードと全4段階のフェーズを劇場側で設定しましたが、今後は一年という時間をどういう区切りをつけながら、それぞれのフェーズでどのような目標を立てていくのか、大枠のプランニングを含め演出家が自由に組み立てていくのもよいかもしれません。

ひと月の稽古で、決められた初日に向かって逆算して進めていく通常の公演形態ではなく、1年をかけて作品に向かいトライアルを重ねることができ、演出家はじめ参加者の意識の変化が体感できる企画です。稽古場、ギャランティ、発表の場も提供され、作品作りに集中できる安心感があります。また、コンペティションではなく、ジャッジでされることなく成長するための意見をまわりから聞けるのは、創作において魅力的です。

一方で現場を見ていて、1年間という長いスパンでプロジェクトを進行させるモチベーションを、アーティスト自身が維持しコントロールしていくことの大変さを感じました。

また、フェーズが終わる毎に審議、進め方を決めるというステップなので、あらかじめしっかりと予定を決め込めません。稽古場確保や、キャスティングも含め、スケジューリングが希望通りにはいかない場合もあり、それも含めて柔軟に楽しめることが必要です。

編集後記

ここまで読んでくださりありがとうございました。こつこつ新聞、次回もお楽しみに！

速報！
2021年春、
こつプロ第二期始動！

